

学校現場では、新型コロナへの直接的な対応だけでなく、子ども達に対する負の影響因子を極力取り除こうと、悪戦苦闘の毎日ではないかと推察いたします。

さて、本年度(1月末現在:予約数を含む)「こども発達相談センターの就学相談」の利用ケースは、84 ケースです。切れ目のない支援のため、引き続き「サポート情報」の有効活用をお願い致します。

今回は、「家庭との連携」について、具体例を挙げながら、一緒に考えたいと思います。

## 【例】「忘れ物が多い」子どもの「家庭との連携」



結論から言うと、「家庭との連携」前に学校ですべきことはたくさんあります。忘れ物が多いからと言って、家庭へ連絡し「家庭で忘れ物のチェックをして登校させてください。」と、お願いすることが唯一の方法ではありません。

保護者と共有する、子どもの成長目標は、「**子ども自身が、『忘れ物をなくす』自分なりの方法を見つけ、実行に移す試行錯誤ができる**」です。教育現場として、その共通目標にどう迫るのかという方針をはじめに確認します。

「忘れ物・・・」の部分をお他の内容に置き換えれば、あらゆる教育目標の設定に使えるそうです。

### I 初期対応

正確な子どもの様子をまず把握します。「忘れ物」のどの部分をターゲットにしたらいかがが見えてきます。忘れ物の実態ごとに、対応を考えていきましょう。対策を検討するには、忘れ物の状況、発達段階、子どもの特性などの情報収集が必要になります。

#### ○実態：音楽の教科書だけ持ってこない

「授業に参加したくない」の意思表示と考えられます。家庭へ連絡する前に、授業改善が必要です。もし仮に、授業改善なしに、用意を持たせ授業に参加させたとしたら、どうなるでしょうか。明白です。「やっぱり、授業に参加しなければよかった」という思いが強くなります。これでは逆効果になります。



逆に、得意な「縄跳び」を忘れないなら、持ってくる力は、十分に備えていることになります。授業参加へのワクワク感を子どもに持たせることが、大切になります。

#### ○実態：宿題を提出しない

「宿題をしない、提出しない」は、大人側の価値観です。宿題の効果は明白ではないが、宿題をする時間を費やすことに意義を感じる、大人の事情です。

子どもは「楽しいこと、興味のあることならやってみよう」と考えています。「宿題をすると子ども自身にとっていいことがある」と子どもが感じれば、宿題はやってきます。昭和の昔は、「強制的にやらせ、後付けて意義を実感させる方法」がとられていました。私は反省しきりです。今、その方法を用いている人はいないと思います。

授業に使うからと言って、「命名の意味」「親の仕事」などを全員の子どもに宿題として出すことは、少し考えれば自明です。深い配慮が伴います。

#### ○実態：毎日、筆記用具(鉛筆)を忘れる

非常に多くのことが想定され、対応は多岐に渡ります。例を挙げ、対応について説明をします。

まず、鉛筆を紛失した可能性があります。

#### ① 鉛筆紛失への対策をする

筆箱の形状を確認しつつ、鉛筆の数を(毎時間、帰りの会)で確認する。また、視覚的に鉛筆がない状態を分かりやすくする工夫をする。「確認する」ための視覚情報を提示する。

#### ② 「こどもが忘れること」は、意思表示である

忘れることは「授業に参加したくない」という意思表示である可能性を想定内にします。その判断をまずしないと、対策は有効には働きません。

#### ③ 家庭の状況を把握する

忘れ物に、家庭環境が影響している場合があります。「忘れ物」即「家庭へ連絡」でなく、子どもだけでなく家庭も成長していく「連携」が想定されなくてはなりません。場合によっては、家庭はターゲットにせず、子ども支援がターゲットになります。

#### ④ 鉛筆を貸し出す

忘れ物改善を子どもに求めず、鉛筆を貸し出す。



#### ⑤ 困った状態にする

「鉛筆がなくて使用できない」困った状態を作る方法です。子ども自身が、「次回は、必ず忘れない」という意識になれば、この対策は功を奏します。ただ、「やらなくていいんだ」と感じたとき、逆効果に転じます。また、「忘れない、やりたい」という思いにさせた授業かどうか、大きな分かれ目になります。

#### ⑥ 「貸してください」のスキルを提案する

「申し出で、鉛筆を貸し出す」スキルを子どもに伝える対策をします。この対策も、参加したい授業であるかが、大きな分かれ目です。

#### ⑦ 家庭へ連絡をする

最後の手段、子どもの発達段階を見極め、「連絡帳、電話」で家庭へ連絡をします。

### II 「個別の教育支援計画」で家庭との連携をする

個別の教育支援計画は、関係する機関同士がどのような支援しているか、その共有が主な目的です。ですから、時間軸の縦だけでなく、横(同時進行)の「保護者・本人」・「学校」・「医療機関」・「福祉機関(放課後デイサービス)」での運用実態がないと、計画の立案は実を伴わないことになります。この計画で、関係機関によるこども把握と支援を参考し、保護者と連携を図るべきと考えます。

そして、子どもに忘れ物をしないスキルアップを求めるには、「子どもが支援で忘れ物をしなくなる力を有している」と判断されるときに、行われるべきです。

以上、「忘れ物」に関する例をいくつか挙げました。

### 【まとめ】

「家庭への連絡」の前に、子どもの状況を判断し対応策をとることは、こども理解が深まり、子どもとの関係成立要件の一つになります。教育成立の重要な条件です。

(文責：MT) ※裏面にネット情報有、試しに覗いてみてください。

## ◇ ネットで入手できる情報 ◇

### ● 言葉力は十分にあるが、対人関係力に課題がある女子

「勉強はできるけど、生真面目さはあるけれど、大きな問題は抱えていなそうだが・・・」と、「・・・」がう女子の実態把握に、大きな示唆を与えてくれます。

○ 「思春期 ADS 女子」と入力・検索

#### 【思春期女子の学校生活】

国立障害者リハビリテーションセンター  
記載項目に

- ：女性の発達障害は気づかれにくい
  - ：生きづらさが表面化しやすい思春期
  - ：学校での生きづらさに気づく
  - ・・・と、説明が続きます。
- 他の項目も充実しています

### ● 通常学級の担任に大変役立つ

偏りのある子どもの指導について、担任も管理職も大変参考になります。

○ 「川上康則 ブログ」と入力・検索

#### 【通常学級での特別支援教育-みつむら】

昭和の生徒指導ではなく、子どもに寄り添う指導を貫いた教育経験者、私の尊敬する方から教えていただきました。

- ・理論に基づいている
- ・教育現場の実情をよく知っている
- ・子どもを大切にしている

そんなホームページです。受け身の研修より、参考になります。

▽川上康則 (かわかみ・やすのり)

1974年、東京都生まれ。東京都立矢口特別支援学校主任教諭。公認心理師、臨床発達心理士、特別支援教育士スーパーバイザー。立教大学卒業、筑波大学大学院修了。肢体不自由、知的障害、自閉症、ADHDやLDなどの障害のある子に対する教育実践を積むとともに、地域の学校現場や保護者などからの「ちょっと気になる子」への相談支援にも携わる。著書に、「通常の学級の特別支援教育 ライブ講義 発達につまずきがある子どもの輝かせ方」(明治図書出版)、「こんなときどうする? ストーリーで分かる特別支援教育の実践」(学研プラス)など。

### ● 通常の学級でみかける、個別配慮の必要な子どもへの対応

私の尊敬する方から教えていただきました。  
奈良県作業療法士会・特別支援教育委員会が作成している手引きです。

○ 「奈良 作業療法士 気になる子」と入力・検索

#### 【学童期編-座れない子どもたち-】

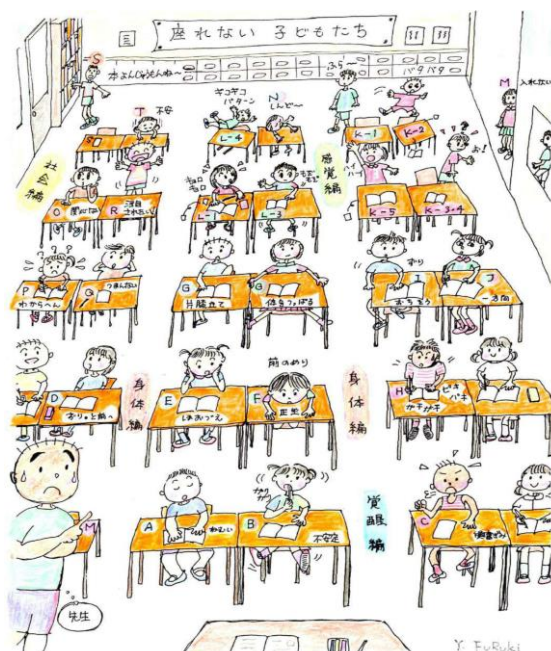
「言い聞かせる」対応しか持たない支援者にとって、目からうろこの対応が満載です。

子どもの体、動き、行動から、子どもをとらえ、対応策を提案しています。

冊子には、以下の記述があります

この冊子の目的は、「子どもたちが静かに座れるようになること」ではありません。子どもたちの抱える多種多様な困り感や様々な支援方法を、先生方と「共有」することにより、座ることに困難さをもつ子どもたちが「主体的に学べるようになること」の一助になることを、執筆作業療法士一同、願っています。

#### ↓ 目次前項に記載されたイラスト



どんな専門書の対応例や指針も、現場で対応する支援者の完全なマニュアル化はできません。試行錯誤の連続により、子どもとの関係は少しずつ成立するように動きだします。もし、マニュアル化できるのなら、AIで対応できるなら、支援者の必要性は大きく後退します。

近い将来、教育現場で多くのことがネット環境に置き換えられていくでしょう。しかし、集団でしか経験できない貴重な機会をどの子にも提供する分野は、人である支援者に、最後まで残っていく役割になると考えます。

(文責：MT)